清明軍談

五

へ13
4418
5

早稲田大學圖書

清明軍談卷之五

○武藤元輝と敵ふの事

流水の物ふる科ふ盈されば行ど君子の道に表ざれ章ば成ざれば書せざるとゝ中賢人を少し〳〵殃ふ遺しりへ〳〵も物ふ天見を恐く悪人を懲んなりと雖ども天後ふ見を待も元暉ぐん考ふ書を好こと天命を知り賢人を勝こ仁を施こもも乗らざる紀綱ふ奸吏林蓬りんがあふ飛うきに図こと剃さん部授枝をうるくの由を世武藤りやう風ふ聞こく大ふ驚き国怒つこく曰く今清の改令ぞこと上い下を虐げ友吏ふ教を偽りこと石灰賈の主元暉ぐんい勇者の人ふ行〳〵ど寇

早稲田大學圖書
早稲田大學教育學部圖書
早稲田大學教育學部
36561
〈2017-7777〉

仁大度にして和不動なる且該人を憐むの君子なるものに
を多一度面会して是を知まり始て吏林達りん幸の
実否を糺さんと捕へて獄ふひとのちなんとす島と没収せ
しめて奇怪なる義を力説せざるに勇士なる我是を勧
けどんがあるべしとて三人の部下を引連れて柱
平縣の屋に押寄せ門を叩き婦と飛り乗入んと
こんぴ女の者ども抜達りふけるを告ぐ林達りん大いふ
驚きて何者なるか何の所為なるもの知らず急放
べ乳をと際に乗り打られて倒れ是を捕ふ打うけ
偃刀を携へ玄関に出屋内の悪党に下知をなすに

怖ぶる士卒狼狽ひ逃げ出て武器も捨て
ひ知らず呼吸を道の極絨め片端より打殺し廣尹林達
りんを搦め捕まく双方烈しく戦ひる武器ひ
生刺る業なれば戦を忘れ者一人もなく幸ひ
難きを又林達りんの士卒に数年とりひ孫ふを手に刺く
汚名を事〻〻戦の初孫〻〻きを知ひて〻〻ひ者
なく兵衛ひ乱れ打ちに付林達りん大音を揚げ
清の屋敷を取まき門を破り押入戦を震ふ天狗
遊ぶべうぐる笠城の手〻〻孤ふ依てべ〻港武器ひ
を生て大不多の天狗ども嗚呼ひ汝我を者ど

やがて捨鍋に武蔵坊弁慶と振て立向ふ林達りん緒つく兵一刀と切結ぶと
かいくぐつて飛入何の苦もなく弁慶と仰て林
達りんぶ士卒五人を付そびと辨りうくるを手ぶくもせず
林達りんと組合ずゝ生捕[illegible]を引揚て辨ずる
中へ投付まつ押ふ打まつく古七人の泰衡ふ兵ども
勢ひふ薄易して[illegible]ぞ武蔵坊弁慶ふ部下勢へ盛んに切
伏突伏勇ましんで戦ふぞ林達りんが古卒奉う先に敵
まづき或い付き或い逃廻ち[illegible]ぬ[illegible]
多く傷ら捕武蔵坊生捕し林達りんと徐径に

多ひ亟部下を引連獄屋のあふ引り入まぶ元曄ぐんを旅
教多の科人を入亟てり武蔵坊先獄屋を打破り元曄
ぐんを救ひ出し[illegible]の科人多く救ち奪り又獄内の女[illegible]
孫[illegible]門部[illegible]の門くい部下を多く警固せ
め元曄ぐんゞまを[illegible]く書院まり上座亟[illegible]武蔵坊
僧ぐい[illegible]家い[illegible]影ふ押入[illegible]強盗の至業法
武蔵坊[illegible]者亟その御ふ若未んを[illegible]仁を[illegible]部て
我意を[illegible]り飛ぶ[illegible]に此獄ふ[illegible]れた
まへ四[illegible]没収[illegible]大[illegible]部下を引具し
強奪く[illegible]の[illegible]武[illegible]者ぐ[illegible]安素の妻[illegible]を[illegible]

清五ノ三

なりとふ此時元曄涙を流し嗚呼義なるかな忠
なりとて我好吏の為に死すべきなりと命を捨てべきなりと
実に義を重んじて敵に向ふ時は武藤ぶの日く死生は命
よりなり我職掌なり汝ゆくべし書を以て君に奏聞
あらく為者の人なり是くは君が先祖の嘉性
を以て也又計らふ所なり元曄の曰く
今此何をか包まん我先祖十九代唐王の簒乱して
唐王滅清水捨てを刑に行はるるを扨王妃姙娠なりしが
乱を避て蜀の四川の地に逃て隠れ住く男子出生後

是ども滅清世を乱く天下一統なれば世の安へを恨り王
朝なりを深く包て後に成あらく此地に移り数代武
勇なる交りなれども共その徳をすべられ人民服をなる居
後の中失に深き一丈の石の柱に唐王の妃に成
初年より代々の由緒書しく徳ある書物あり婚姻せ
給ふを好く伝られて武藤ぶ邪下の
者を生りて石の柱を婚姻せ武藤ぶ手にあり
書物を見て恭しく元曄ぐおよび玉元曄
より国の色を用き押載て武藤ぶ涙を此時武藤ぶ
涙ぐまれて無実の罪を思惟

して予が親兵先達てより廣東府より水師へ拘留する所の
奏ひ出さんと手ずから水師に用化山を作む事伯玉
女城主を奪うんと数度の彩下を使へ勢に打く掛り
途中に於く桃こ戦ひしが水軍も万史不南の豪傑その上
不思議の浜辺ありて委既水軍ある一命を保うんとする
時に伯玉りく中るるい明の忠臣事叢ぐりぶ義極く
ありて九仙山にて美人と出会ひにて忠明呉渡の英王
紀うん海紅色を御くべしとあさるに依く我大義を懐く
と切し事出来ぬ我と作よ色を明うん中と家より来
事よ承諾一書く盟をあして別に今君の作と考へ

清五ノ五

合されがまぐ小方るき大明呉後を成るの英王く世の流
も文紙の作る作ふ天を戴ることを中は上い君ん臣を改一
呉後の義兵を起し先書伯玉張道弘と兵と
三人の彩下をんを獲一まりまくよう金銭を始めく
小家よ攻へんるり易うべしと元帥をあふ清の将呉
を深く悪し打捕に我牙も彩る憂見ふ安ひいよく清と怨
むの涙れが武統りぶ動め色天の時至りと内ひい
大ふ怪ぶと言ども打武統りぶが色を捕うんあり給と
皇下して同く中の勢めは色を取り彩りと量ども我家い
久しく武ると年く石庚賢人の名を蒙りそと上不徳の業

偽小王朝なるものを義士義兵と稱し人民
の攻撃を受(け)るを者こそ大義を全うせんと
欲するのこころなんぞ始めて後流書の人民殺戮する
罪を顧みんと雖も亦もそも殺戮天の
財い地の理い人の和を如何ぞ地の理を
一民を暴虐一既に暴を恣にすれば亡ぶ
及べり是則ち天の時し用化山水事伯玉りく法道ふ
あり郭山よい事を横行一山川廣野ならび
海色の要害を題格一是を書の中うん是地の理なる
るも君えまう法人を情みるが如く父母の如く

清丹六

暴小系も亦明のごとく是人の和く天の財を失ひ大業を
なくちめるの勿論と爰に義兵元曄國面の郡を會
言葉も改めく汝ら徐人陸を(こ)く以上ハ手をよ紀を義兵
と紀さん者動と者(れ)我を助けよ先ず敵後方功を業一点ハ主
後の約束として字を元華に改めれば武
結ふ大小慌び苟しくも素ぶ條言と條宴(ハ)ひ字の西
一字を賜る上ハ弥二心なく身命を拋ち忠を隠(さ)ん
那くハ部下の者共も四海を下ることを雖ん郭
金程陝徐經おを始め部下部ぶ一方の
部を中央を朱元曄元曄飼て

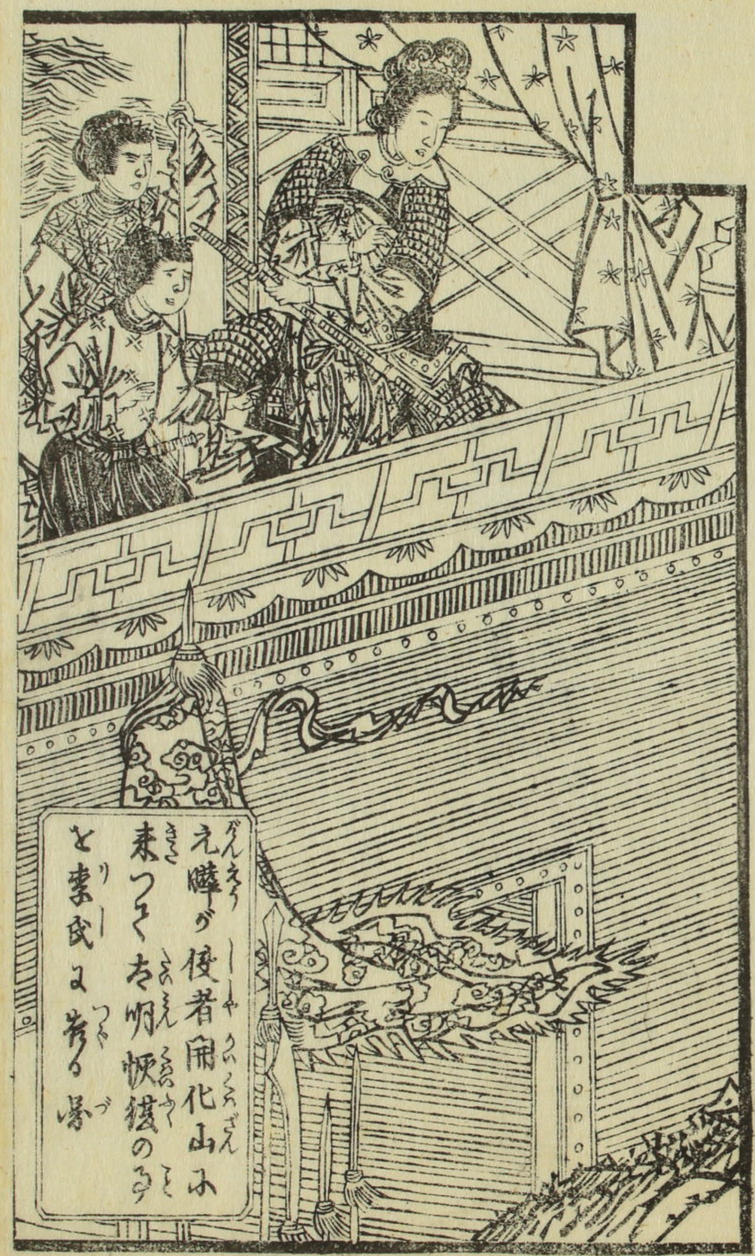
仕給ひ初を受千べきの旨を述まゐ皆〻畏縮驚き貴と
洪武龍下和して既に亟庭をもとへ上奏仕法
の其主ふ出達一身を事伯玉張道弘と共に
り別ち茶元曜しゆんゲ書を扨を妻細の口上ともヤ合
鄭金翟瑛の夷人を開化山へと発させる

○李氏弦氏傳ふ発の国中森彦流の付法
却設開化山の主張李伯玉い國中森彦流の付法
人を掛け人を懸け者り大義を金と懸る所に李氏達く
小家より対ふとして李武曲ねいぶグ問へと発き長へ
長年多くの手和具を傳く悦べと要ども山上へ長く対ふ

問べしとおもへとその使へとなきでい叶ふまじと紀下の内
和別る者数を断に福建の所へ分きり病擒の人
数と生むるおりり廣東郡山の主張洪武龍より使
として鄭金翟瑛る者数と跨り白泡冷まく開化の
山寨へ発来る李氏りの紀下長と尺く武龍ぶ使者
なるるの寨者ぶ李氏ぶ小家より対ふの和具なんと決龍を
長開流へ放さんと手る時鄭金ゆくゆく長を寨一先へ
武龍ぶ使者ぶ李氏りしる所の別斧を受く長上
より李氏しぶ郎の長を尺く大へ伺り樽より李氏を
開山鄭金長へ言へと洪武龍ぶ紀下の者

うり此度事支人へ一大事を荷ふ使者の役者より挟箱刀
を取り此由事支人に達しめんと大音よ使をつとり先
を分く門を開き柳天寥彼別荘を請元
て事氏りみ勢と若く事氏り先を没め刑ち法武能ぶ
りと玄智しる別荘に参区事氏を使者を遣さ
と柳天寥りて鄭金鼎雇漢支人を擒
み命じて
み至人崇伯玉りて支使を付けて
て我主係慶西湖の豪家へ押入り時主郎さ我に
酒者をもへ仁義を絶し事氏を義堂完化大変して易者
の人ふあるぞと嘆しく思ふに何ぞ計らん先ずの

彼の豪家の主斎弁ふ捕えを獄より家焼ふ没収せられ
事実の死ふ陷入りと哀さ先と救ひるい義りるく勇そ
るまるる似りと我ふ事務を抜ふ彼豪家より押寄の府尹林達
りんを生捕る人数い或い討元又い門卒へ長医豪家の主
を獄より救ひ出しく主人の由緒来歴を尋ねる場ぐり元
右附十九代唐王の落胤で朱華紅字い元曄とり則
唐王の崩おお去中より出てく明斎能ふべりぐ且事氏者天
下の主るる事るる一比生支人より取り屋莫三ちを
ちるしと知る符合ちを成能 恢復を勧めるう
即ち主従の契約を結ぶ義を揚る一変さしるべ支人


元曜が使者用化山ふ
来つて右明恢猿のる
と素戔嗚と争る場

清十九

も急ぎ浸潤へ事向あるべし　別位大夫よりの位書是と
恭くしく是を以て李伯玉ぎりく張道弘ぎりくと共に浸
で祝祭もを文を白く

先朝十六代天啓之時愛親覺羅從備州起而二十代至
永曆悉滅之一統中華而世既九代是朕舊敵也剩今
上極驕使奸曲之吏虐万民万民已迫飢餓清之悪行天
焉免之哉朕受天命與汝等共舉義兵殲滅清而報祖先
之冤政虐政於善政欲撫育万民汝等夙來而助我大義
可盡國忠也

庚戌三月　　朱元曄

李伯玉
張道弘

李伯玉ぎりく張道弘ぎりく天を深く悦ぶの張りなく鄭金
翼侯えいの友人を要く答礼元曄が使者ふ敬
下を要深ふ要張為へさの旨を義へ浸潤ふ祝祭を事ふ
民り法民ちり法儀しく部下の者共へも右の旨を
せ[illegible]帰復のことを聞くふ清の昔政を万人の悩むお拓
事民りの軍勢を使役するの日沢懐け奉り事るべ
淅江の達を上より我先へと張集の白を拔ふ硫ふ七万
を浸さりく交るを拔へく事民り生ぶるの義意あるものを

撰〻半て隊を分け一は[illegible]を率し[illegible]め行へし[illegible]の金
銀紙宝武器及び米粟等の軍用を分け持せ来たらふ
の大幟を押立得あさして能き見を見
て人〻考へよと服せるを源[illegible]れて[illegible]
臺[illegible]して書伯玉[illegible]ゲ軍を率へ又い力を揚げ壯
者い味方に加り[illegible]も風ふ靡く[illegible]の如く廣西[illegible]府
[illegible]る時い[illegible]勢十万に及びる既て[illegible]有る[illegible]
[illegible]年縣の此方に陣を布き[illegible]玉[illegible]の
[illegible]人〻[illegible]を引[illegible]先[illegible]武[illegible]能[illegible]
[illegible]を[illegible]武[illegible]安[illegible]

[illegible]拜を[illegible]む[illegible]人[illegible]後[illegible]奏[illegible]我[illegible]い先[illegible]原[illegible]の
[illegible]の来[illegible]て[illegible]武[illegible]も[illegible]清の粟を食
む[illegible]を[illegible]清の[illegible]汝[illegible]武を[illegible]む
[illegible]仍年義兵を[illegible]清を伐く[illegible]の世り恢復[illegible]武を
安んぜんとを切りて帝[illegible]形[illegible]今君恢復の大業を全て
[illegible]を[illegible]書を[illegible]怒悦の[illegible]に
[illegible]人[illegible]事[illegible]十万を率て[illegible]と速[illegible]
曄[illegible]喜[illegible]汝[illegible]由[illegible]来歴い武[illegible]
[illegible]く[illegible]用[illegible]
二心なく[illegible]動を[illegible]

まくしてあたれば夷人ども敗走す台を洋船にて乗り海面
こぎ出せり
○潤州府に於て軍評定のり
玄宗より元曄を勅めて恢復の主とし給ふ武龍
高宗伯玉に張道弘の勢を合せて二十万人
廣西潤州の内和元成より山附潤州府より襲のうち
南京平南城あり城を盧朝陽けりを少て大に
張さ玉を遣ひ兵を派し山を海に出て高麗
高麗の一万騎を接けて潤州を討しむ高麗一万の
軍勢を引て敵向ひ三十里おいて陣を張る陸武龍

清五千二

を引て八千騎人の逆兵を引率し山度奪ひ火
岩迦農白磯天地を傾く半途に押出して矢戦を交
り火陣を乗り狭地を打掛る武龍り陣より
右の大旨一連に奏し無痍ひ矢を打て出戦み戦ひ
ども高麗り火陣一面に火の如く大陸方陸に敗走す後
陣を代て人ども敗走す道狭く火海の如
を防げども共扇を武龍り兵揚
切立て人ども逃し人食さんとする様子平南さして
逃る武龍り智謀ある者ども逃を捕る兵
笑を入れ水の潤州府に陸し元曄りあり出て軍の様と

奏しられて元曄、大悦の合戦、十分の勝利あるを
悦び武能ぶ功を賞し、みな武能ぶ京もゆく奏し
ける所倩考るに今日の合戦を利あると雖ども常地
の要害全くなくて危角して日を移さば必ず諸国より
命ず大勢押来るふ可しと勝敗の理定来る所
り述氏に答ふる軍議評定をなすべしと奏して
元曄も是を若しと事氏しあと云き軍議評定を
なる席にて朱元曄一旦の夜討を思ひ一旦の
座上に清武能ぶ右の座上に李伯玉張道弘
柳天羅陳連幸軒鄭金翟璜

たい徐達公の言居所ならば此時元曄祠を奉一今軍
兵集りて勢ひあるを例られども此所に要害の地なくば
言ふ仮の塞景なり所まる要害の平城を築きどもこの
地より戦を始めん汝等先に軍議をしと此時張
道弘中なるに敵世上の人事を察るの清を恐むる
者多く我等郷により毒なる為に恢復の義
等と使て法人見を悦び流るを為して三万騎の軍勢を
清ら我らに人の和をもつて押こんに何ぞ城郭の全きを
恃まんや平南城より金義を始め法を奉く暗清一直
ちに北京を攻へ清帝の首を引抜き国家の安寧を永

さんと勇まく漢うら御天龍りうんの曰く往昔いあと
和むるよ敵びあると敵く屠せ例あり為あるいは漢あ
府と玄瑞の地と王郭を定め法方を攻平ぐんいうふ
と云事伯王りくの曰く天の附況の理人の和い是三徳の
具足し天の時い既る漢うら地の理を撰むるの行要ちうは
得あ府い往古ようの名称の郭せ携ふあるぞ漢中の
地い殺函を九ゆ隴蜀を有ゆ三面岨つく武を囲ゆるの
地い往昔漢のうち紅い張良が勧めうて此地ふ郭をトて
大漢四百年の基を建つ拠るは熱勢を率て彦る故
添い攻撃し武い統く漢らしめ漢中にむく王郭を築ぐ

ゆ家の軍勢中義万況の智術あうて何の百万緒まの事共方
義ゆる知安うべし法方を四海くて下を平委ぎんと
云法武能りゆぶい始うう戦ぎして居らしが此附序を
うんぐ中指事丈人りよの作恋ちう移まで今附い法
古ち法華西海を先へして法ゆ航海の術ようは又い大術
を持る漢中の地尤要地ちまるゆ多き事して海賊の法
ぎ不使ちん統ふ英者利も年大清ぐ艦を法び度
蜀の利注ちゆう信ちまい一旦い清ち加勢とちまぐし給ゆ
附いゆを定海夏門ちう軍船ちまぐし柳南系の船い
ち朝所以の方法ち海の要地受竟共ち通時蓬葉を建

清五ノ十五

楽親王南京を
攻め下り天子を
虜し建清の降
ねと敬さ号

五人支那金銀の財宝を奪ひ一統一明の太平を唱
ふるなり郭を漢中に接せしもの度〻と云れば元遼
陽も此言を見て滅亡疑惑の心智を感服し伊
濃一度〻これを畏れ恐れ奴隷の威豊元年
太明帝崩御の儀数百年繁昌の大統を押領あるを立て南
京の政人と共に又軍令を下し金銀財宝を採め婦女を
犯さるの礼物の来れある時は一〻首を刎んと義林の郭を
陣〻へ給後〻威義を誓〻て知べし

○後明用義の事

既不軍機一度〻これば清武龍を大元帥とし慶西得

命を抑ひ出を先陣を張道弘三万人茅三万人茅二八都天羅
郭金の右右三万人郭四八本陣朱元曄親〻徐経亲軒を後へ
万人後陣を李伯玉五万人清武龍八条元曄
の本陣不〻〻〻右後左右不下紅を為せ勢二十万
人軍威盛んなる太明の諸微風を鷺せ廣西得府を陥
し廣東福建に西を後〻不或い打〻敗れ〻あるひハ
降参し又ハ太明帝を悦び来り加るもあり〻〻彼
大軍野を充山を後〻抑行不除も人なき所を行ぎ〻〻
勢ひ彼此のごとく敵対べくも敵ざるよに西徳の巡撫朝

元宗、を清の大臣とし、人へ勇將なりけるを、ゆゑ
なく後を生じ、親をしひたるまゝに西に押寄るの地を
作へ、それで急ぎ軍勢を整へて、五万騎を二ハに分け
一ハは自ら鄱陽湖に軍船を連ね、一ハは郡下の大根なる所
に下り、総て凡千萬余の地に陣を張り、紙幟さゝ立て、
朱元璋しゆんぶ此よし聞て、三万人押寄り、鄱陽湖
の此方に引取り、湖水の橋を切落し、百隻の船を連、陸の方の人、軍
船を大元帥に渡し、武器を用ひ、思ひ思ひに
もとしに、敵を待ち受ける方は、湖水を渡らんとせども、敵
に

寄せ、敵を誘て敵船をして渡らしめ、計策を設け、張
道弘、の三万人を漢辺をく押寄て陣を張り、鄭金、
の三万人を右の方羅漢に、の三万人は左の方の武徳に埋
伏させ、弘道、は軍勢を繰出し、敵を平地へ
あしらひ、味方の内より、五騎、五十人を撰び出し、漢陽へ
入せ、敵を流言して曰く、廣西の援軍
南京に攻入んと、下へと来まども、南国巡撫のくに、
湖西の軍船の設けあるべ、元より軍船なき廣西勢、渡り
給へ、先に不見を、今の勇者、撰び、衛り、ゆゑ、
不ととて、攻付べ廣西の大軍一波うちもみる時、義付ぎして日

を延さべと滋の家くを打毀ち義を進ぐ浪ぐをの支
度をとりて長し強ある賊八万民の国務言んうを以て
是等義りゆりが浮く思意をし一達し此り子くを敵の劉元宗
てうぐんが耳よ入をくうんべ是れ符験を知りて疑ひ
猶よ躊躇し張道ぐ行くの陳るるを加ふ能ひり
て劉と共ぐ劉元宗が是を聞き皆し思惟し様とを
を拍く深智ある敵の猜様や我敵の強くるを深し
高ぐべ態と紛まをし手を附嘲笑不意り是対ば伏兵
とんく路を切く我を滅を襲ん遠行ぐるり我ハ
敵の孫行ふ入ぐと是ども此り意を遠ぐ此を機

と表ちろん百戦百勝ぐ今敵の強弱の裏を対伏兵
昔よ拾のごく打崩し城主の首を獲ん幸此一戦ぐ
分捕を名して今帝の恩蔵ふ新ら汝等も昔よ後代ぐ
を称ぐ上陸せば一ふ人の敵よ恐しく南り二ふハ
左右よ多を理仏の敵勢を不対べし軍勢を定め
直ちよ教百騎の軍勢を一連よ従く西南の峯ふ押寄
毒矛ぐと打掛ば張道ぐの勢ハ右往左往ふ逃走る
劉元宗の軍勢ハ皆一団よ上陸し三ふ此れ
一ふ西面の敵よ列し南り二ふ左右の仕寄ふ
ふ寄入ぐり鄭金紅翠の本陣ハ思ひ掛ぐ

切腹しまた雅頼と共に敗北を請元宗
軍い十分の勝ちぞ長信さく蹴れきとく
討ち徳武龍りぶい為く陣しこと敵が先より
為く故方の軍機動静とやうもの事よ遠ざ請元
宗ぐい者勝して兵今押渡の者と岩く此時雲龍
も柳天羅ふ同じ我陣ず既よ為ろ此途を知ちく
うべ先より汝ふ命ぜ為ら為ら沖らふ敵とふ為を
なも柳天羅りん仕事 這岩二千騎人を後 義ら為て
遍ふ湖水の赤を打渡 敵の本陣よ襲ひ入東ふ火を掛
離波を陸と揚ら付陣ふ物り止まる士卒い表廃あるい

歩渡ふ為り 務岩の方ろ上ぶ足もろく 西岩ろこの附
請元宗も 到 敵ひるぐ 風と後を敵まぶ湖水
を渡 我本陣ふ火紅家くと立ち同の勢り逆よ
ゆ上ぶ扱い反間の陣計に義入るろと 安合の服黄ぐ
本陣を救りぐんぶあぐ 為ろと湖水をさて 西を雲龍
ふ下知を伝くさ 敵の本陣い味方を中く 繁ろ陸ふ
ある敵勢を急く 鄱陽湖の水層 軍艦を奪へと 義長
急ぐ切を上ぶ請元宗 ぐ軍勢い 穂ふ義為ろく
残りちくふ討ろ 姫の義勢ふ 付も射ぐ湖 ふ義
元宗く 命ろぐ 陸あさて 敗北に又陸の ふ付平万ふ

八月朱伯王、十万人を以て張飛が陣へ向
の多秋もなく打て掛り給へ二度三度攻寄せ給へ
多年恐れ給へ敵へども元より智勇備はる朱伯王
が陣へ向て強く攻たる如く敵を多く殺
陸の二度より孫軍の兵を奪ひ敗ふ武能ぶ
下知して奪ひ敗の軍船あり
と打渡り響手縣の地へ朱伯王
一日方年の飛号を休め程漢柳天羅
と授け饒舌を押へ給へ孫の十八万と三度合て南京
天成石城に押寄三方より攻寄せ敗れ大系

強き一戦も及ばず城を捨て養夫より孫元曄
急く進れて出ず城に入て要害を堅め方年の飛号
と休め急大明帝援の織武あるべしと吉日を撰ぶ法武能
朱伯王張道弘を始めとして孫の
白ろを数しく天を祭り黒牛を殺して地を祭り法武能
と大元帥と朱伯王副将と張道弘を
中郎将として孫呉を準して急く安を授け孫元曄
と孫権王と孫呉と年号を後世の天徳元年と建る不思
議なるかな日南京石城に使ふの手柄引渡るの繁盛
より呉吉祥小唱ゆる国象南の祝らんとしるみど祥兆あり

これ是名のみを云ふべし　幸既に定まりぬれば急に石紙
城を降遠して王都に進　親王即位あらく後明
天徳帝と号奉り　清の風俗衣裳を改め古用の
改ふ復古　又降系の者い免し　歓対者い来ふ対を元
向べきの旨国中に布令を出す　清を怨るの諸侯い
怪んで降系　清に忠ある者い此ものを少弟に術へ軍談と
為し　中華忽ち二つに分れ移動大方ならず

先より鞭を北方に揮起し　大清の四国侵略の報
を聞く窃に蠢動　遂に攻入る　天徳帝に属し　又
英吉利清と接けく　武徳の智勇雲泥玉ゴ
妖術に忍術　清の帝王威豊帝
自ら授戒を絶く　数度の大戦終に利なくして北京
都の陥まぐ　面白き　英雄豪傑の事
情状仏の霊験あること方今の中華の説を演
こと仏しく後篇にて嗣て発兒

早稲田大学図書館
150190080155